

高原の風だより

2018(平成30)年3月 発行 <第12号>

なぜ木曾へ、どうして開田高原へ？

～1ターン者フォーラムで意見交換～

少子高齢化などによる人口減少が大きい問題になっている中、移住者から転入の動機やきっかけなどを伺い今後の移住者受入のヒントを探ろうと1ターン者フォーラムが2月18日、木曾町開田高原の母子健康センターで行われた。地元の村おこしグループの開田高原倶楽部(坂口和芳会長)が県の地域発元気づくり支援金を活用して行ったもの。当日は町内を中心に50名余りが参加。最初に東京経済大学の羽貝正美先生から「共に生きる場を豊かに創る」～1ターンという選択と地域自治～と題して講演をいただき、続いて移住者9名から体験発表、最後は交流会で活発な意見交換が行われた。



羽貝先生(左から4人目)を囲んでの交流会で乾杯をする参加者



体験発表する移住者



フォーラムには50人余りの住民が集まった

「御嶽山の雄姿に一目惚れ」等など・・・ ～移住者から貴重な意見～

体験発表をした9名は、仕事も年齢も出身地も移住の時期もまちまち。移住するという事はやはり大きな決心を伴う。たとえ仕事が見つかり、住宅を確保したとしても「氷点下20度にもなるという冬の寒さは大丈夫だろうか」「地域へなじむことができるだろうか」等などそのほかにもさまざまな心配事が尽きない。そういう中「美しい御嶽山に一目惚れした」「2人ともボードや登山が趣味。御嶽山の雄姿に妻も賛同してくれた」「1年間会社の寮で暮らしながら顔見知りができ、地区へもスムーズに入れた」「トウモロコシのオーナー制度がきっかけで農家とお客との交流が始まった」「子どもたちと木曾馬のふれあいの場づくりをしたい」といったように非常に興味深い貴重な声を多く聞くことができた。

今回、講演とコーディネーターを務めていただいた羽貝先生は「移住者を増やすためには特効薬や処方箋ではなく、いわば漢方薬が必要」とした上で「互いに異質なものに出会うということでは違和感は当然。それぞれの価値観を尊重しつつ互いに良いと思うこと、こうしてはどうかと思うこと、大事にしたいことなどをはっきりさせて共有することがとても重要。そして少しずつ課題と思われることを解決することができるのではないか」と話した。また「このような機会や場をどんどん増やし広げて欲しい」と提言し定住人口の確保と交流人口の拡大に期待を寄せた。

～第11回開田高原かまくらまつり～

雪原に子どもたちの歓声響く



ジャンボ滑り台を楽しむ子ども



会場には高さ6メートルの巨大雪だるまやかまくらが造られ来場者を迎えた

冬の寒さや雪を地域づくりにつなげようと2月3日（土）、開田高原かまくらまつりが西野下栗尾の農道や牧草地などの特設会場で開かれた。開田高原地域協議会（中村肇会長）が主催し、今年11回目。

今回は1月半ばを過ぎてもまとまった降雪が無く、開催が危ぶまれたが直前にまとまって雪が降りとうにか予定通り行うことができた。それでも巨大な雪像や雪だるまを造るとなると雪が足りず、地元の建設会社が御嶽山の麓から10トントラックで100台分の雪を運んだ。

当日は、この時期にしては信じられないほど暖かい好天気に恵まれ、町内外から訪れた1500人余りの観光客や家族連れなどがかまくらやジャンボ滑り台、宝探し、馬ぞりなど多彩な雪遊びを満喫、雪原に子どもたちの歓声が響いていた。

多彩で楽しい体験イベント

～長さ30mのジャンボ滑り台や馬ぞりが大人気～

かまくらまつりの魅力は、さまざまな体験イベントが用意されていること。かまくらや雪だるまづくりをはじめ、その滑り、馬ぞり、スノーモービル試乗、スノーシュー、たこ揚げ、餅つき、豆まき、宝探し、雪上グランプリ等など。宝拾いだけは小学生以下という年齢制限が設けられているがそのほかは誰でも自由に参加できる。もちろん参加は無料だ。

子どもたちに一番人気の滑り台は会場に2つ造られた。自然の地形を生かした造りのジャンボ滑り台は長さが30メ



馬ぞりを楽しむ家族連れ

ートルほどあり迫力満点。子どもたちは主催者が用意した肥料袋で作った特製のそりを使って滑り歓声が上がっていた。

このほか家族連れにとりわけ人気だったのが馬ぞり体験。木曾馬の里（乗馬センター）から来た「空ちゃん」が、順番に子どもたちを乗せ雪原をぐる



かまくらづくりを行う親子

りと一周まわり子どもたちを喜ばせた。

また、農道では木曾建設事務所による除雪機械の展示コーナーも設けられ、親子連れが除雪車の運転席に乗ったり、高所作業車のバケットから景色を眺めたりして楽しんでいた。

冬の寒さや雪を大いに楽しむ ～デメリットをメリットに～

標高1100メートルの開田高原は、県内でも屈指の高冷地。厳寒期には気温が氷点下20度を超えることもある。そのため県の南西部に位置している割に降雪量も比較的多い。かまくらまつりは、デメリットとして思われがちなこの冬の寒さや雪を大いに活用し、メリットとしてとらえ大いに楽しもう、と始まった冬のイベントだ。

寒い冬は大人も子どもも家の中に閉じこもりがちになり、天気の良い日でもスキー以外では、外で遊ぶようなこともほとんど無い。

そんな中、このイベントにはいつも町内外から多くの子どもたちが親御さんと一緒に大勢訪れる。かまくらを造ったり滑り台で遊んだり、宝探しをしたり、と普段では体験できない冬の雪遊びを大いに満喫し楽しむ。今年もかまくらの中におやつを食べる子どもたちの笑顔がいっぱいあふれていた。



かまくらに入って笑顔あふれる子どもたち

温かいすんきそばが好評



日が沈むとアイスクャンドルに火が灯された

～夜はアイスクャンドルや星空観察も～

この日、会場には商工会開田支部などによる出店がオープン。すんき汁が振舞われたほかすんきそばや焼きトウモロコシ、ピザなどが好評だった。

日が沈むと今度は会場に約1000個のアイスクャンドルが並べられ火が灯された。するとやさしいロウソクの炎の中にハートマークが浮かび上がり会場は幻想的な雰囲気包まれた。

午後6時から巨大かまくらの中で、木曾星の会による講演会と星空観察会も行われた。

そのほかかまくらで造った一晩だけの「居酒屋かまくら」もオープン。ワンコイン500円で一杯飲めるとあって店内は観光客と地元の人たちの交流の場にもなり会話が弾んでいた。

さらなる魅力づくりのために ～地域をいかに巻き込むか～

さて今後、さらにこのイベントを魅力あるものにするためには、地域住民や各団体の方々と一緒になって作り上げていくことが重要だ。福島で行われている「雪灯りの散歩道」は、住民ボランティアがアイスクャンドル作りをしたり、信州木曾看護学校や林業大学校、木曾青峰高校の学生をはじめ保育園や幼稚園の園児らがアイスプレートや雪像を造ったりしてイベントを盛り上げている。そのほか地元の企業や商店も店の前に雪像を造るなどしてにぎわいを生み出している。本当に素晴らしいイベントだと常々思っている。

これからかまくらまつりをさらに魅力あるものにしていくためには、「雪灯り」のように地元の学校や団体、住民らを巻き込んでいくことが肝要だと感じている。



宝探しで雪の中を一斉に走り出す子どもたち

はりきりご長寿列伝

かに りきいちろう
可児 力一郎さん (85歳・南木曾町) ⑫



可児力一郎さん

私はNHKの信州ふるさと通信員をやっていますが、テレビのイブニング信州の「はりきりご長寿列伝」では、高齢にもかかわらず今なお元気に仕事をしている人、自分の趣味に専念している人など元気あふれるお年寄りを紹介しています。今回は南木曾町の可児力一郎さんを紹介します。(1月24日放送)

木工業の文化を守っていききたい ~ヒノキ箸 年間30万膳製造~

「小さい時からいたずら好きで、竹の弾力などを生かしたカラクリなどを作っていた」という可児さん。木曾路を代表する特産品の一つ木曾ヒノキ箸の製造と卸を営む可児工芸の会長だ。「木の目が通っていないとダメ。今でも木取りと機械の調整は自分がやっている」。自宅に隣接する工場では、さまざまな機械が並ぶ中、長男の春吉さんと孫の真由美さんと3人が息のあった作業を黙々と行っている。

可児さんは1941年、小学3年の時に両親と弟、妹の5人で開拓団の一員として満州(中国東北部)へ渡った。終戦後、残留生活を経て58年に帰国。その後は営林署勤務のかたわら副業としてヒノキ箸や絵馬、楊枝入れなどの木製品を作っていたが81年、可児工芸を設立し本格的に箸の製造を始めた。

当初、箸作りは全て手作業で、一日100膳作るのが精一杯だった。そこで「作業をより効率的に同じ品質で仕上げたい」と箸の原型の木材に丸みを付ける面取り機や表面を磨き上げる機械、箸に焼き印を押す機械など全て自分で設計して機械化を進めた。そして今では、ほとんどの行程を機械化にして年間30万膳のヒノキ箸を製造するまでになった。



箸作りを行う可児さん



「南木曾の木工業の文化をこれからも守っていききたい」と話す可児さん。去年は国土緑化推進機構(東京都)が選定する「森の名手・名人」にも選ばれた。また、満州で苦労した経験から中国残留者の身元引受人になるなど残留者の支援を続けるとともに、「戦争の傷跡を風化させてはならない」と平和を伝える講演活動にも積極的に取り組んでいる。著書『風雪に絶えて咲く寒梅のように』(下記「私の本棚」参照)は、可児さんの終戦後の残留生活などをまとめたもので2003年に自費出版した。健康の秘訣は、食事の塩分を控えめにすることと雨の日も風の日も毎日必ず行う30分の散歩だ、という。

左から真由美さん、可児さん、春吉さん

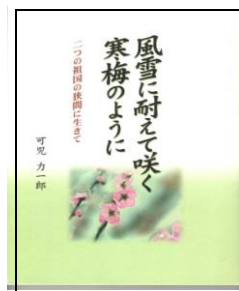
梅のように』(下記「私の本棚」参照)は、可児さんの終戦後の残留生活などをまとめたもので2003年に自費出版した。健康の秘訣は、食事の塩分を控えめにすることと雨の日も風の日も毎日必ず行う30分の散歩だ、という。

私の本棚

『風雪に絶えて咲く寒梅のように』

(可児力一郎著・信濃毎日新聞出版部)

可児力一郎さん(85歳)1941年に家族5人で読書開拓団として満州へ渡った。終戦間際の45年にはソ連軍が侵攻し開拓団は逃避行を余儀なくされた。その後、過酷な収容所生活を経て残留生活を送り58年に帰国。「悲惨な経験を後世に伝えるのが自分の責務」と中国での体験をまとめたのが本著。



編集後記

人の出会いやご縁は本当に不思議だ。NHKの「はりきりご長寿列伝」の取材で可児力一郎さんと出会い、またそのご縁で先日、可児さんに案内いただき阿智村の満蒙開拓平和記念館を見学した。また、機会を見て可児さんからじっくり当時の話を聴きたいと考えている。



編集・発行者： 大目 富美雄 (おおめ ふみお)

〒397-0301 長野県木曾郡木曾町開田高原末川 5190 番地

電話& FAX 0264-42-3661 携帯 090-2526-7156

E-mail info@ome-fumio.com